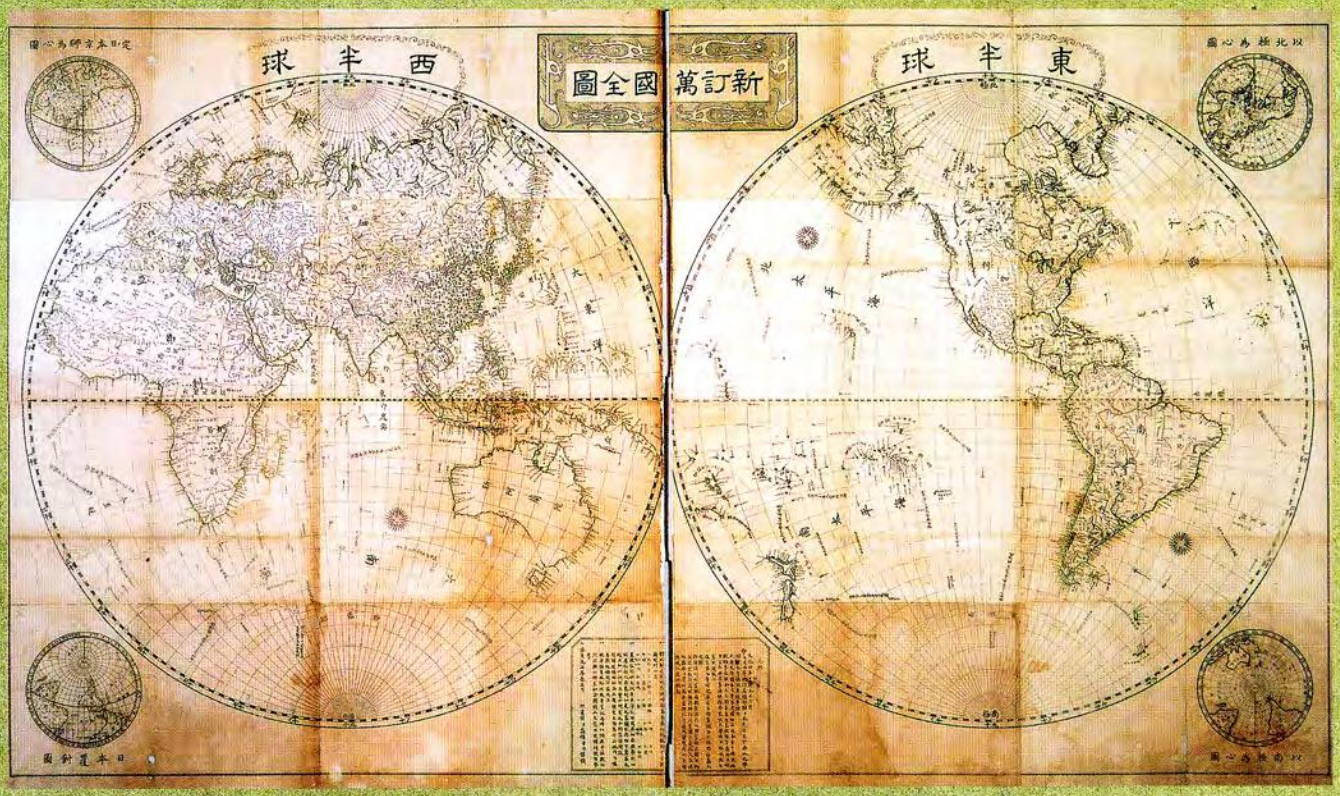
川越市立博物館

博物館だより

第30号



新訂万国全図（当館蔵）

本図は、幕府の命を受けた幕府天文方の高橋景保が、天文学者間重富や長崎通詞馬場佐十郎などの協力を得て完成させた世界地図である。当時の幕府文庫に保管されていた世界地図などが参照されたが、最新情報でもある間宮林蔵の樺太探検や伊能忠敬の実測図の成果も取り入れられている。日本における世界図作製史上の一大傑作といわれている。

この地図の印刷は銅版で行われており、それを手がけたのは江戸時代後期の洋風画家永田善吉（号は亜欧堂田善。1748～1822）である。善吉は、老中を勤めた松平定信によって寛政６年（1794）に見出された画家で、定信は彼を御用絵師に採用し、銅版画の技法を習得させたという。また、監修者の高橋景保（1785～1829）は江戸時代後期の天文学者で、父至時（伊能忠敬の天文学の師）の跡を継いで幕府天文方となり、忠敬の日本地図作製事業を監督するなど大きな業績を残した。しかし文政11年（1828）に発覚したシーボルト事件の容疑で逮捕され、翌年獄死した。享年45歳であった。

地図は銅版刷り16枚をつないでいる。日本が中心になるよう東半球を右に、西半球を左に掲げ、図の四隅に北極、南極、京都を中心の半球及びその裏半球の小図を配している。中央下部に凡例があり、その最後に「日本文化七年春三月　測量所臣高橋景保謹識」とある。凡例中の文化７年（1810）は手書きの地図として完成した年代と考えられており、この銅版図の刊行年は文化13年（1816）頃とされている。

中福村絵図（黒田氏所蔵）について

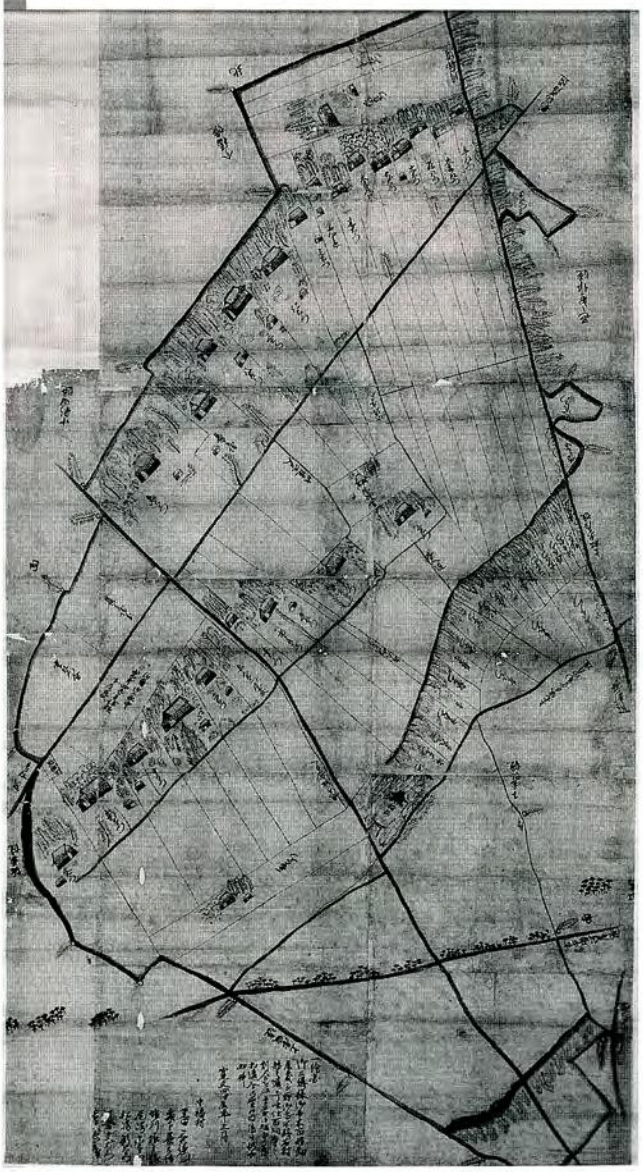
1．はじめに

本図は、これまで博物館の常設展示図録への掲載や平成10年度の「絵・地図をよむ」講座で解読及び現地見学を行い、紹介する機会を得た。

本稿では、今までの解説や分析をもう一度整理して絵図の特色をみるとともに、他の同時期成立の史料と併せて近世初期の新田開発の一端について若干の考察を試みたい。

2．村の概況

中福村は、市域の南部、不老川右岸の台地上に位置する。文化・文政期（1804～30）編さんの「新編武蔵風土記稿」によると、承応年中（1652～55）に開墾の地とある。川越城付の村として入間郡川越領に継続して属した。村高は、「武蔵田園簿」（慶安２年）には記載がなく、「元禄郷帳」（元禄15年）では76.57石、「天保郷帳」（天保５年）、「旧高旧領取調帳」（明治元年）ではともに280.093石と飛躍的に増大している。台地上のため畑作地帯である。



現在、この中福村は川越市福原地区の一つの字、中福となっている。稲荷神社や阿弥陀堂等の社寺のほか、馬頭観音（三国観音）や弁財天、庚申塔等の石仏が点在し、文化財が数多く存在する地である。道や地割など今回紹介する村絵図の様相をよく残しており、絵図と見比べながら歩くのにも適している。

3．「中福村絵図」の概要

本図は、寛文４年（1664）３月に作成された中福村の本村域を表した村絵図である。近世に中福村の村方三役を勤めた黒田家に伝来したもので、39点の黒田家文書の一つでもある。現在黒田功氏の所蔵である。黒田家の祖先は、万治３年（1660）の取立証文に仲間頭黒田三右衛門とあり、この頃開発に入ったとされる。

原図の現状は軸装であるが、折り目の跡が残り、元は折本装であったようである。本紙の法量は縦182.7㎝、横97.0㎝で、和紙15枚（一部半裁にしたもの）を貼り合わせている。図柄の端が欠損しており、軸装した際に裁断されたと考えられる。虫損やしみ、汚れがあるが、文字や図柄、彩色等よく原状を残している。凡例はなく、家屋や社寺の壁面、道に朱色が用いられ、樹木は薄緑色である。特に隣村との境界等が濃淡２本の墨線で描かれ、強調されている。また、本図には端書がある。

一絵図
御公儀様御並木百姓畑
屋敷立野御高不残右村
始之通吟味仕百間五寸之
割合を以印置候処少茂
相違無御坐候為後日仍而
如件
寛文四甲辰年三月
中福村
黒田三右衛門
森下長兵衛
塩川作兵衛
尾崎六右衛門
松崎新右衛門
落合文右衛門
吉沢忠兵衛

意訳すれば、藩の持分の並木や村民の畑、屋敷、御用の立野（採草、造林適地）を残らず確かめて、村の一部始終を吟味し、100間を５寸の割合で記したことは間違いなく、後後までのために書き記す、となるであろうか。苗字のある７人の名が書かれ、村の代表者が本図の作成に携わっていることは間違いない。

一般に近世の絵図は、公文書として機能し、その作成目的にそって一定の空間を取り出したり、省略が行われる場合が多い。例えば、水論や山論などの裁許絵図では、将来にわたる証拠として境界の明確化が行われるのである。しかし本図は、現在の地形図と同縮尺で比較すると、一部にずれがあるものの、全体的にほぼ同じである。実測に基づいてかなり正確に作成され

ていることが分かる。

4．絵図に描かれる特色等

（1）縮尺、方位

縮尺については、前述のように誇張や省略によって縮尺がはっきりしないものが多い中、本図は100間を5寸と明記されている。1間を6尺として換算すると、1200分の1に相当する。

方位は、絵図をみる上では一番初めに確認するものである。近世の絵図では、現在の地図のように方位の配置は特に定まっていたわけではなく、地理的状況や作成の目的に応じて北が上になったり、南が上になったりした。さらにまた、図上の南北が実際の正確な南北とは限らず、目安であることが多い。

本図の場合は、「西」、「南」、「北」が書かれている。「東」はないが、右側が裁断されているため当初は書かれていた可能性がある。「北」は左上に、「南」は右下にあり、これらの位置は適当に書かれているようにみえる。しかし、「北」「南」の書かれている場所を直線で結んで経線とし、上下になるようにずらすと、図柄は現在の地形図と同じ配置を示す。つまり、縮尺と同時に方位もきちんと把握されているのである。今から330年以上も前の一村において、このように高度な計測技術を要する村絵図が作成されたことにはとても驚かされる。

（2）道

道は朱色で描かれ、道幅に応じて太さが異なる。太い線には、「新河岸道」「所沢道」「川越道」「上赤坂より寺尾河岸道」「古市場河岸道」「青梅道」の文字が読める。細い線の大部分は「九尺道」と書かれている。これらの道の中で、「所沢道」「川越道」「古市場河岸道」沿いには立ち並ぶ樹木が描かれている。当時の藩主は、街道並木における杉等の植樹について奨励しており、そのことに関係があるのであろう。並木は、藩の作事方が使用する「御用木」として各種の建築材等に調達されることもあったといわれる。

（3）境

「今福境」「中新田境」「堀兼境」「上赤坂境」「下赤坂境」「上松原境」とあり、隣接する村々との境が記されている。道が境界となる部分以外は、濃淡2色の二重線によりはっきりと明示されている。また、境界の曲がる地点や道との合流点等では○に樹木の絵が描かれ、境塚を示していると考えられる。

このほかに、「邑々出作境」と書かれた部分がある。この場所は、現在今福の一部となっているが、当時は近隣村の共同利用地となっていたことが窺える。

（4）塚

「三国塚」と「二つ塚」の2カ所が描かれる。「三国塚」については、この絵図と同時期の寛文4年8月15日付けで書かれた「由跡書」に詳しく記載されている。この「由跡書」は、村の代表6人により作成されたもので、村の開発の経緯や寺社の由来、川越藩主による検地の際の除地、年貢が掛かるようになった経過等の記述がある。「由跡書」によると、「三国」と呼ばれる名馬が将軍より松平伊豆守に授けられ、後に中福村の新田奉行中沢弥兵衛に預けられ、その世話を中福の三右衛門という者が熱心に行った。万治2年（1659）8月10日に落命し、埋葬されたとある。

現在当地には、「万治二年八月十日」銘のある馬頭観音が堂内に安置され、地元のあつい信仰の下に大切に受け継がれている。かつて馬が主な輸送手段だった頃は、馬との関係が深い人が遠方からもかなり訪れたという。

なお、「由跡書」に書かれた中沢弥兵衛という人物は、松平信綱が川越藩主当時の家臣の役職、姓名、俸禄、出身地等を載せた記録、万治元年（1658）の「松林院様御代分限帳」に記載がある。それによると、本国が甲斐、生国も甲斐で、高100石の知行取の藩士ということが分かる。また、別の史料「明暦三年（1657）松平信綱触書請印帳（写）」の条文の中にも、「一かぞ（楮）同断 植やうさし様弥兵衛存候、一桑 同断 植やうさし様能存之者ニ可承候、一漆 同断 植やうさし様弥兵衛能存候」と名をみることができる。優れた農業技術を持つ役人として、松平信綱の農業政策や武蔵野開発における技術指導に当たっていたと考えられる。

一方、「二つ塚」は絵図上、道の両側にそれぞれ○に樹木が描かれている。由来は特にないが、街道筋にあり、また川越城下から約2里（約8km）の距離にあることから、一里塚として名付けられた可能性がある。現在でも、描かれた付近は「ふたづか」と通称されている。

（5）寺院、神社

寺院には「弥陀堂」がある。この弥陀堂も前述の「由跡書」に記述がある。「如意庵の由来は」の書き出しで始まる。新田奉行の中沢弥兵衛が仏法に帰依していたため、小屋の脇に本尊を阿弥陀仏とする如意庵を立てた。その後中沢弥兵衛が如意庵と本尊を持って引き払い、屋敷内は皆御竹林にするようにと村人に伝え、村全体で守った。また村には僧侶が一人もいなくて不自由していたので二間半三間の小庵を立てて円桂という僧侶を迎え、見栄えのよい阿弥陀仏を求めて安置した。そのため如意庵とも阿弥陀堂ともいうとある。

現在は、絵図に描かれた場所ではなく、「稲荷」から西に少し向かった所に「阿弥陀堂」と呼ばれる堂宇がある。何らかの経過により移転したと考えられる。堂内には平安時代の木造阿弥陀如来坐像が安置されている。「由跡書」に書かれる見栄えのよい阿弥陀仏との関係は不明である。

また、神社には「稲荷」がある。やはり「由跡書」によると、中沢弥兵衛が川越城の天神門脇にある稲荷を新田の守り神としておまつりするように命じられ分祀した。その後に村の鎮守として改め、小屋の内に稲

阿弥陀堂

稲荷神社

荷大明神とおまつりしたとある。現在も同じ場所にあり、「稲荷神社」と呼ばれている。地域の鎮守として大切に受け継がれており、毎年４月19日には、市指定無形民俗文化財の「中福の神楽」が奉納される。

（６）下屋敷

「川越御家中岩本四郎兵衛様下屋敷」と村の西側の一角に書かれている。この岩本四郎兵衛は、前述の「松林院様御代分限帳」に記載がある。本国が伊勢、生国は遠江で、侍分切米扶持方50俵３斗５升取りの代官であることが分かる。また、黒田家文書にある延宝４年（1676）４月、「五人組改前書覚帳」の宛所としても記載されている。新田奉行の中沢弥兵衛が開発終了で引き上げた後、その後継として現地に下屋敷を構え、直接に村内を掌握していたと考えられる。

（７）人名、屋敷、樹木

本図には、端書に書かれた６人を除くと計28人の名が記載されている。この内、家屋や耕作地のある一筆分の土地だけの者が６人、それに加えて立野あるいは飛地分も持つ者が22人となっている。開発当初は25軒であった旨の記載が「由跡書」にあり、３軒ほど増えている。また、黒田家文書の中には、安永９年（1780）に書写された「貞享四丁卯年（1687）武州入間郡川越領中福村生国宗門改帳」（近年この原本が発見された）がある。これには、34人の名と出身地、檀那寺、入植以来の年数が記載される。出身をみると、近在の川越藩領より黒山村、竹沢村など遠方で山間部に近い幕府領出身が多くみられる。参考までに出身地を表にした。

屋敷においては、入母屋造りと見られる家屋が多く、壁が朱色で描かれている。母屋のみの家が10軒、母屋に加えて別の棟を持つ家が16軒、家の記載がないのが２カ所である。

樹木は、凡例がないためよく分からないが、細い線で大きいものと丸っぽいものの２種類がある（「古市場河岸道」沿いには違う形の並木が描かれている）。前者は松や杉、ケヤキ等の大きな樹木を示し、後者は低い樹木を示していよう。

ここで、本図の土地利用の位置関係を見ると、非常に規則的に配列されていることが分かる。南北に細長い地割で、土地の北から順に屋敷林、家屋、道、畑地、立野となる配置が大部分である。家屋の後背に位置する屋敷林は風除けの役目を果たし、畑が屋敷の延長にあるため、移動も容易であると考えられる。また立野についても、藩の御用林として機能したが、一部は村民の利用が認められ、生活の資材や畑の肥料の供給源として利用されていたであろう。これらが一体化していることに、合理的な循環型農業の一つの形態があると考えられる。水利の比較的悪い台地における、農業生産を上げるための工夫が読み取れる。

（８）堀

「悪水堀弐間成」とある。村の中央部を南北に通る道沿いに平行する。ちょうど村の中心に位置し、東西の耕作地からの排水をまとめる用水と考えられる。

５．おわりに

以上、絵図に描かれる特色を中心に考察してきた。

この中で特に注目されるのは、本図の縮尺や方位の正確さである。開発が川越藩主導とはいえ、一つの村で作成されたことは、相応の目的があったからにほかならない。端書には、御用並木や百姓畑、屋敷、立野を吟味して作成したことが書かれるが、所在を示すだけであれば、縮尺を正確にした絵図を作るまでの必然性はないのである。本図を残すための目的は何であったのか。残念ながら、現時点では裏付けられるだけの史料がなく、十分に検討することができない。開発が進むにつれ増加した武蔵野の入会利用村との争論、藩主導の新田開発における成功事例としての記録等、いずれも想像の域を出ないが、今後も引き続いて課題とし、より明らかにできればと考える。

（付記）

今回この史料の掲載にあたり、史料所蔵者である黒田功氏に多大な御協力を賜りました。深く感謝申し上げます。

（学芸係　峯岸 太郎）

出身地	人数	現在の地名	所属
川越町	2	川越市	川越領
網代村	1	川越市山田	川越領
上郷村	1	川越市古谷上	川越領
杉下村	1	川越市松郷	川越領
松郷村	2	川越市松郷	川越領
上戸村	1	川越市上戸	川越領
鶴馬村	1	富士見市鶴馬	川越領
扇町谷村	1	入間市扇町屋	はじめ幕府領、正保頃には旗本朝比奈氏の知行、後に田安家領
高岡村	1	日高市高岡	はじめ幕府領、延享４年からは一橋家領
黒山村	8	入間郡越生町黒山	はじめ幕府領、後に旗本島田氏の知行
龍谷村	4	入間郡越生町龍ケ谷	龍穏寺領
三保谷村	1	比企郡川島町三保谷	川越領
日影村	1	比企郡玉川村日影	
竹沢村	7	比企郡小川町	はじめ幕府領、宝暦14年に清水家領、寛政８年に幕府領
我野村	1	飯能市吾野	

（人数は、家守と書かれた１名は含まない。所属は、「新編武蔵風土記稿」による）

分館だより
── 蔵造り資料館 ──

穴蔵

蔵造り資料館に穴蔵があることを御存知でしょうか。実は、店蔵に1坪半程の底面をもつ、レンガ積みの内壁による穴蔵があります。

さて、東京では江戸とよばれていたころから、人々は様々に地下を利用してきたようです。その一つが穴蔵です。穴蔵とは現在でいう地下室で、地下に設けられた倉庫といえます。そして、穴蔵は耐火性が高いため特に火災の多かった江戸ではおおいに普及していました。

ここで、穴蔵の機能を列記してみましょう。

・防火施設としての機能
・金庫としての機能
・収納施設としての機能
・夏の涼をとる部屋としての機能

などが挙げられます。

それでは、資料館の穴蔵はどのような使われ方をしたのでしょうか。江戸の例では、店舗の表の方にある穴蔵は、いざ火災というとき瞬時に商品などを投げ込めるように、もしくは商品の補充を短時間で完了させるための収納庫として設置され、最も奥に設けられている場合は金庫として使われていた可能性もあるようです。このことから類推すると資料館の穴蔵は店蔵にあり、防火施設と収納施設の二つの機能をもっていたのではないかと考えられます。

穴蔵は完璧な防火・耐震施設であったとはいえないまでも、よほどのことがないかぎり燃えたり壊れたりはしないものだという絶対の信頼があったようです。

しかし、人気の高かった穴蔵も明治20年代（1887～96）ごろになると、その繁栄に陰りが見え始めます。それは、保険会社などの登場が理由として考えられます。

つまり、一向に減らない火災に対処する方法として、どうせ燃えてしまうのなら維持管理に手間隙と大金がかかり、場合によっては焼けてしまうこともある穴蔵よりも確実に保証されて面倒のない火災保険に走ってしまったということです。

それでは、東京でこのような状況のなか、明治26年に資料館（当時は煙草卸商「万文」）は建つわけですが、東京で廃れ始めた穴蔵をどうして造ったのでしょうか。よく、川越の蔵造り商家は川越の商人が抱く一種の江戸文化に対する憧れであったといわれます。そのため、東京の街では過去のものとなりつつあった蔵造りを敢えて建てたのだといわれます。穴蔵に対しても同じような理由から同時に取り入れたのでしょうか。それとも、単純に以前からの踏襲だったのでしょうか。

また、東京では明治30年代になると保険会社が数多く設立されているのですが、川越の商人にとっては火災保険という概念がまだ浸透していなかったのか、あるいはまた受け入れることができなかったのでしょうか。

今後、これら疑問点について、調査を行い解明できればと考えております。

○参考文献
「災害都市江戸と地下室」吉川弘文館

旧小山家住宅平面図（昭和47年ごろ）

利用状況

平成11年度　博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館

右表のように、平成11年度中も多くのお客様に御来館いただきました。誠にありがとうございます。

今年度も皆様のおいでをお待ちしております。

県民の日・市民の日の関係で、平成12年11月14日（火）、12月1日（金）、12月3日（日）は無料で御入館いただけます。どうぞ御利用下さい。

施設区分	年間入館者数	1日平均入館者数	開館日数
博物館	(人) 138,239	(人) 494	(日) 280
川越城本丸御殿	124,796	429	291
川越市蔵造り資料館	125,510	431	291

常設展示室から

「ふるさとのまつり」コーナー

写真提供：宗形慧氏

雀ノ森冨士浅間神社のお焚き上げ

平成12年7月29日(土)～10月26日(木) の展示

雀ノ森冨士浅間神社のお焚き上げは、毎年9月1日、新宿町1丁目にある氷川神社境内で行われる富士講に関するおまつりです。

富士講とは、富士山を信仰の対象とする信仰集団のことです。江戸時代には爆発的に流行し、八百八講とも言われるほど数多くの富士講が組織されました。講の人々は、富士山へ信仰登山をしたり、人工の富士塚を築いてそこに参拝したりしました。各地に残る富士塚からは、当時盛んだった様子をうかがうことができます。

川越にも富士講がありましたが、新宿村（現新宿町）ではそのひとつである山吉講が組織されていました。明治18年（1885)、山吉講の先達であった栗原七蔵が氷川神社境内に富士塚を築き、冨士浅間神社をおまつりしました。以来、毎年富士山のお山じまいの日を祭礼の日としてお焚き上げが行われるようになりました。まつりは、関東大震災や太平洋戦争中にも一度も休止することなく現在に至っています。

まつりの当日は、境内に仮宮が置かれ、四方を竹で囲んだ中に薪が高く積み上げられます。露店も軒を並べ、夕刻になるとお囃子や民踊が奉納されます。まつりの雰囲気が盛り上がってきたところで、お焚き上げの行事が始まります。

白の行衣に手甲、脚絆、白足袋に白頭巾と全身に白い富士講装束をまとった行者15名が、鈴を鳴らして富士塚に向かいます。山頂で身を清めた後に下山すると、仮宮の前で正座し、富士講の経文「富士山御傳」を唱えて祈願をします。続いて薪の回りを一回りしてから、薪にろうそくで火をつけます。そして願い事と願い主の名が書かれた祈願札を篠で作った長い箸で挟み、次々と焚き上げていきます。昔から、お札が燃えながら天高く舞い上がるほど御利益があるといわれてきました。お焚き上げが済むと、季節は秋へと移っていきます。

原始・古代の展示

牛塚古墳出土 銀装刀子

ここに紹介するのは、市内的場の牛塚古墳から出土した「銀装刀子」と呼ばれる古墳時代のナイフです。

牛塚古墳は、6世紀末から7世紀初めに築造された全長43mほどの前方後円墳です。昭和40年代に行われた発掘調査によって後円部から横穴式石室が発見され、武器・馬具・装身具などさまざまな副葬品が出土しました。石室内への死者の埋葬は2回行われ、銀装刀子は、後述する二つの金銅製指輪とともに2回目の埋葬の際副葬されたものと考えられます。

展示室に飾られている銀装刀子は、全長約30㎝。スポットライトを浴びて銀色に輝いています。しかし、このように完全な形で出土したわけではありません。出土時には、柄巻の銀線と鞘口の筒金しか残っていませんでした。欠失した部分を、各地の出土例から類推し現在の姿に復原することができたのです。

銀装刀子の細部を観察してみましょう。柄巻には、鏨で細かな刻み目を入れた銀線が巻かれています。出土した時には、柄巻の中に、柄木と刀子の茎の一部が残っていました。鞘口の筒金には、刀子を腰に提げる際紐を通した足金物が付されています。

さて、この華麗な銀装刀子は、本来どんな人物の所持品だったのでしょうか。難しい問題ですがいくつかの手掛かりがあります。ひとつは、銀装刀子と一緒に出土した二つの金銅製指輪です。この指輪は、銅板に金の薄板を被せた直径2㎝ほどの指輪で表面に綾杉文が刻まれています。こうした指輪の出土は全国的にも数例しかなく、朝鮮半島系の文物として注目されます。また、村上英之助氏は「新羅の刀子」という論文の中で、朝鮮半島では女性が男性に親愛の情を示すため、守り刀である刀子を贈る習俗があった可能性を指摘しています。

渡来系の豪族とその妻。この銀装刀子を手にしたのは、こうした人たちだったのかもしれません。

Information

平成12年度の行事予定の一部です。

講座・教室 etc.

行事	日程	申し込み	行事	日程	申し込み
夏休みにおくる映画会 ミュージアムシアター	7/22・23（土・日） 8/5・6（土・日）	当日、直接 博物館へ	野外博物館教室 「川越の城下町めぐり」	10/28（土）	10/9（月） 9：00～
ベーゴマ・お手玉・その他いろいろ 昔の遊び	7/29・30（土・日）	当日、直接 博物館へ	民俗芸能実演 “上寺山の獅子舞”	11/3（金）	当日、直接 博物館へ
夏休みの宿題に困ったら 夏休み自由研究相談教室	7/29・30（土・日） 8/5・6（土・日）	当日、直接 博物館へ	博物館歴史講座 「歴史の道探訪 ～川越の鎌倉みちと上道～」	11/8・15・22 （水）	10/10（火） 9：00～
ピンホールカメラを作って 川越の歴史探検 子ども博物館教室（前期）	8/2・3・4・24 （水・木・金・木）	7/14（金） 9：00～	野外博物館教室 「川越の石仏を訪ねて」	11/12（日）	10/11（水） 9：00～
絵図の解読と現地見学 絵・地図をよむ	9/2・3・10 （土・日・日）	8/10（木） 9：00～	古文書の解読を中心に 古文書講座	11/18・25（土・土） 12/2・10（土・日）	11/8（水） 9：00～
土笛を作ってみよう 子ども博物館教室（中期）	9/23・24（土・日） 10/1・22（日・日）	9/6（水） 9：00～	影と光のファンタジー “川越の伝説” 影絵劇	11/26（日）	11/7（火） 9：00～
和風建築の見方、楽しみ方 野外博物館教室 「川越のたてものウオッチング」	9/30（土）	9/11（月） 9：00～	魅惑のパグパイプコンサート ミュージアムコンサート	12/3（日）	11/15（水） 9：00～
博物館歴史講座 「城下町探訪 ～川越と岩槻～」	10/11・18・25 （水）	9/12（火） 9：00～	伝統の技に触れる 子ども博物館教室（後期）	12/17（日） 1/27・28（土・日）	11/10（金） 9：00～

＊お申し込みは、電話・ファクスで。変更する場合もありますので、詳細については「広報　川越」を御覧下さい。
お問い合わせは、博物館まで。

土曜体験教室

毎月第二土曜日、博物館で遊んでみませんか？

平成12年	8/12	博物館フォトラリー
	9/ 9	新企画
	10/14	わらなわ作りをしよう
	11/11	新企画
	12/ 9	火おこしに挑戦しよう

●時間　午前10時～11時30分
　　午後１時30分～３時30分
●場所　川越市立博物館体験学習室、他
●申し込みは不要です。当日、直接博物館へおこしください。
参加のための入館は無料です。

わらなわ作りをしよう

第10回収蔵品展

暮らしのよそおい ——祝い・粋・祭り

平成12年７月22日（土）～９月10日（日）

特別展示室の展観

当館には、皆様の御厚意により寄贈された数多くの民具資料が収蔵されています。これらの資料は、かつて人々が暮らしのなかで使ったものであり、私たちの先祖の生活を物語る貴重な資料です。

今回の収蔵品展は、「暮らしのよそおい」をテーマに着物（和服）を中心に紹介します。

現在、私たちは学校で、職場で、家庭で、洋服を着ています。今日では洋服は、毎日の暮らしに欠かせないものになっています。しかし、洋服が普及する以前は、着物（和服）が人々の生活着でした。

かつて普段着では、縞模様の着物が多く着られました。縞模様は、１本１本の色糸の組み合わせを変えることにより、様々な美しい縞を織りだすことができます。そのため多種多様な縞柄が生まれ、人々はその柄でおしゃれをしました。

一方、お宮参りや七五三、婚礼などの人生の節目には、華やかな晴れ着と呼ばれる衣装を身にまとい、お祝いをしました。

今回の展示では、婚礼衣装・お宮参りの祝着・縞の着物・川越まつりで着用した衣装などを　Ⅰ．祝いのよそおい　Ⅱ．粋のよそおい　Ⅲ．祭りのよそおいの構成で展示する予定です。

----- 利用の御案内 -----

◆開館時間　午前９時から午後５時まで（ただし入館は４時30分まで）

◆休館日　月曜日（休日は除く）、毎月第４金曜日（休日は除く）、
休日の翌日（土・日曜日は除く）、年末年始（12／28～１／４）、
燻蒸期間（７月上旬頃予定）、特別整理期間（12月中旬予定）

◆入館料

区分	博物館	川越城本丸御殿	川越市蔵造り資料館	3館共通券〈博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館〉
大人	200円（160円）	100円（80円）	100円（80円）	300円
学生・生徒	100円（80円）	50円（40円）	50円（40円）	150円
児童	50円（40円）	30円（20円）	30円（20円）	80円

●（　）内料金は、団体〔20名以上、１名につき〕の場合。

●開館時間・休館日は、３館とも同様。（燻蒸期間・特別整理期間は博物館のみ休館）

交通案内

東武東上線・ＪＲ川越線　川越駅より
または西武新宿線　本川越駅より
東武バス　「札の辺」下車徒歩８分

発行日　平成12年７月10日　　発　行　川越市立博物館
〒350-0053　川越市郭町2丁目30番地1　☎0492-22-5399